
土地分類基本調査

身延・赤石岳

5万分の1

国 土 調 査

山 梨 県

1989

序 文

本県では、新総合福祉計画に基づき、県土の開発及び保全と、より高度な土地利用に資する目的で、昭和55年度「富士山」図幅をはじめとして、以来年次計画により10図幅の土地分類基本調査をまいりました。その間、中央自動車道の全線開通や大規模開発等が進み、とりわけ土地に関する情報が重要視されるようになりました。

本年度の調査は、「身延」「赤石岳」図幅（国土地理院発行5万分の1地形図）のうち山梨県の行政区域について、地形、表層地質、傾斜区分、水系・谷密度、土地利用現況を収録したものであります。また、印刷につきましては、昨年度に引き続きコンピューターマッピング方式を採用しております。

農林業、あるいは防災施策の基礎資料としてはもとより、近年、中部横断道路、中央新幹線等の構想も浮上するなかで、この調査の成果が、より多くの皆様に利活用される事を希望いたします。

最後に本調査に御協力を頂きました関係各位に深く感謝の意を表します。

平成元年3月

山梨県農務部長

堀 越 孝 良

目 次

序 文

まえがき

総 論

- I 位置, 行政区画および面積…………… 1
- II 人口および世帯数…………… 4
- III 地域の特性…………… 6
- IV 主要産業の概要……………11

各 論

- I 地形分類図……………15
- II 表層地質図……………25
- III 土 壤 図……………28
- VI 傾斜区分図……………32
- V 水系・谷密度図……………33
- VI 土地利用現況図……………34

資 料

- コンピューター・マッピングについて ……35
- 土地分類基本調査における面積測定……………36
- について

ま え が き

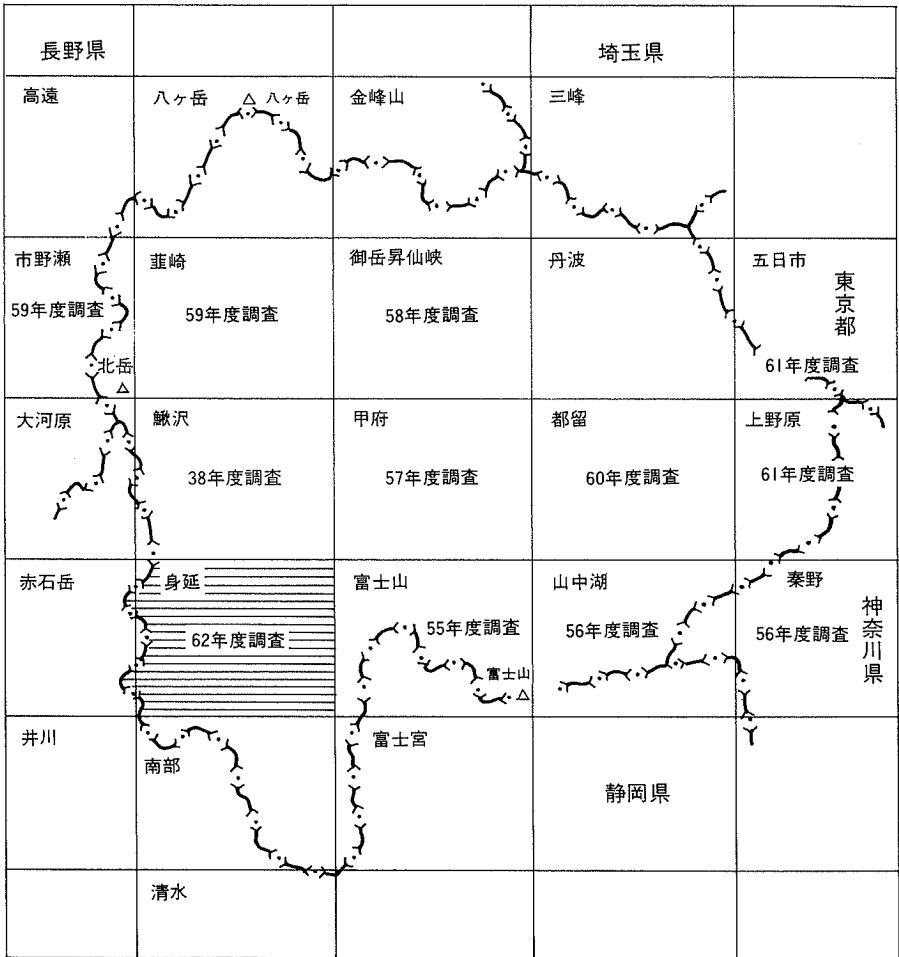
1. 本調査は、国土調査法（昭和26年法律第180号）第5条第4号の規定により、国土調査の指定を受け、国土庁土地局国土調査課の指導の下に、山梨県が事業主体になり実施したものである。
2. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿である。
3. 調査項目、成果の作成機関及び担当者は、下記のとおりである。

調査機関	作成機関	担当者
地形分類調査 標高・傾斜区分調査 水系・谷密度調査	山梨大学教育学部 〃	教授 吉村 稔 助教授 平川 一臣
表層地質調査	山梨学院大学 大月短期大学 山梨大学教育学部 宝石美術専門学校 山梨学院大学	教授 浜野 一彦 〃 田中 収 助教授 角田 謙朗 〃 服部 清二 講師 河西 秀夫
土 壤 調 査	山梨県総合農業試験場 〃 〃 山梨県林業技術センター 〃 〃 〃	場 長 田中 正成 研究管理幹 日向 進 研 究 員 秋山 康三 所 長 熊谷 喜孝 主任研究員 馬場 勝馬 研 究 員 清藤 城宏 〃 田中 格
土地利用現況調査	山梨県農務部農村整備課 (62年度)	副 主 査 近藤 弘 主 事 手塚 昭夫
総 括	山梨県農務部農村整備課	課 長 松坂 雪春 主 査 有泉 大 副 主 査 鈴木 孝司 主 事 塩野 開

総

論

第1図 位置 図



I 位置，行政区画及び面積

1. 位 置

「身延・赤石岳」図幅は，山梨県南部に位置し，「身延」図幅は，西部にわずかに静岡県を含み，「赤石岳」図幅は，その大半が静岡県であり，東部に山梨県の早川町西端がわずかにかかる。

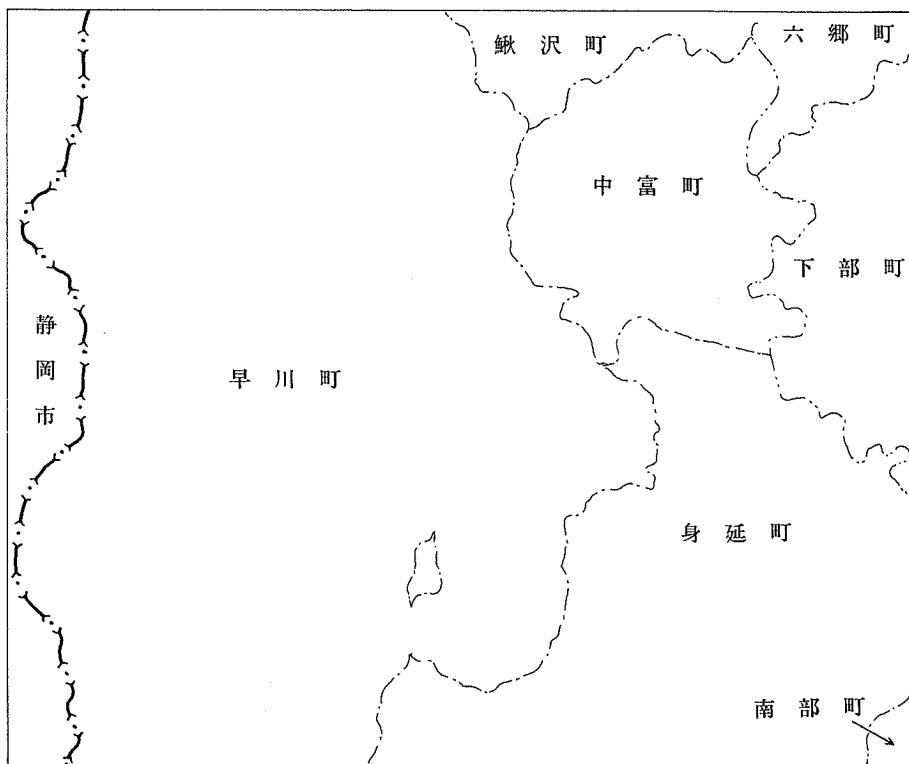
経緯度は，「身延」図幅は東経 $138^{\circ}15'$ ～ $138^{\circ}30'$ ，北緯 $35^{\circ}20'$ ～ $35^{\circ}30'$ ，「赤石岳」図幅は東経 $138^{\circ}00'$ ～ $138^{\circ}15'$ 北緯 $35^{\circ}20'$ ～ $35^{\circ}30'$ の範囲にある。

本年度は，「身延・赤石岳」図幅の内，山梨県の行政区域を対象とした。

2. 行政区画

「身延・赤石岳」図幅の行政区画は，第2図のとおりで，鰍沢町・六郷町・中富町・早川町・下部町・南部町・身延町の7町から成っている。

第2図 行政区画



3. 面 積

本調査対象区域内の市町村の行政区画面積及び図幅内面積は、第1表のとおりである。

第1表 面 積

市町村	図幅内面積		市町村面積		占有率 A/B(%)
	面積(km ²) A	構成(%)	面積(km ²) B	構成(%)	
鰺沢町	9.84	2.4	47.45	5.6	20.7
六郷町	8.73	2.2	13.28	1.6	65.7
中富町	42.91	10.5	42.91	5.0	100.0
早川町	224.55	55.1	369.96	43.7	60.7
下部町	32.61	8.0	130.76	15.4	24.9
南部町	2.06	0.5	112.44	13.3	1.8
身延町	86.60	21.3	130.47	15.4	66.4
計	407.30	100.0	847.27	100.0	48.1

資料：建設省国土地理院「昭和61年度全国都道府県市区町村別面積調」による。

但し、図幅内面積は、コンピューター・マッピングによる面積測定の結果に基づいた数値である。

II 人口及び世帯数

1. 人口

この地域は、その大半が針葉樹等の深い山林に覆われた急峻であり、居住可能な場所が限定されており、また、中核となる産業に乏しいこと等の原因により、全体的に都市部への人口の流出傾向にある。そのなかでも、特に早川町は過疎化の傾向が著しく、又、長年にわたる若年層の流出により急速な高齢化という現状が生じ様々な問題にも直面している。町では「うるおいと活力のある町づくり」を目標に地域の特性を生かし、様々な試みを実施し、流出傾向の歯止め、及び若年層の定着に着実に成果を修めている。

なお、図幅内では、富士川及びその支流に人口が集中し、周辺の山間部では、集落が点在する程度で、人口密度が極端に低くなっている。

2. 世帯数

人口の減少に比べて、世帯数の減少傾向は鈍く、2～3の町では、昭和55年度を境にして増加へと転じている。これは、この地域においても核家族化が進行していることと、人口減少が挙家離村という形ではなく、就学・就職等による世帯構成員の一部転出という形をとることが多いこと等の理由による。

第2表 人口および世帯数

市町村	昭和55年			昭和60年			増			人口伸び率 B/A			
	人口(男)	人口(女)	計(A)	世帯数	人口(男)	人口(女)	計(B)	世帯数	人口(男)		人口(女)	計	世帯数
鯉沢町	2,652	2,964	5,616	1,573	2,520	2,763	5,283	1,551	- 132	- 201	- 333	- 22	0.94
六郷町	2,328	2,491	4,819	1,271	2,290	2,428	4,718	1,299	- 38	- 63	- 101	28	0.98
中富町	2,674	3,022	5,696	1,724	2,585	2,918	5,503	1,747	- 89	- 104	- 193	23	0.97
早川町	1,409	1,596	3,005	1,062	1,229	1,422	2,651	1,061	- 180	- 174	- 354	- 1	0.88
下部町	3,700	4,019	7,719	2,186	3,575	3,841	7,416	2,264	- 125	- 178	- 303	78	0.96
南部町	3,664	3,781	7,445	1,899	3,479	3,693	7,172	1,902	- 185	- 88	- 273	3	0.96
身延町	4,790	5,017	9,807	2,632	4,597	4,811	9,408	2,673	- 193	- 206	- 399	41	0.96
計	21,217	22,890	44,107	12,347	20,275	21,876	42,151	12,497	- 942	-1,014	-1,956	150	0.96

資料：昭和55年度国勢調査
昭和60年度国勢調査

III 地 域 の 特 性

本地域の東部を、南北の方向に富士川が流れ、この富士川に沿ってJR身延線及び国道52号線が走り、主な行政機関や文化施設は、この川の流域に集中し、耕地や集落などの生活舞台も川沿いの沖積地や河岸段丘、及び山腹の傾斜地に点在している。

図幅の西部一帯は、七面山等のなだらかな山地に覆われ、ここにはスギ・ヒノキなどの針葉樹林が多く植林され、豊かな森林資源として県内随一の木材の供給地になっている。又、水資源の貯蔵庫としての役割も担っており、その他、早川水系では早くから電源開発が行われ、ここは県下で最大規模の発電地帯になっている。

なお、図幅の南部は、静岡県に近いため、静岡県の富士宮市、富士市の岳南地方との結びつきが強く、生活物資の購入・婚因等、岳南地方は峡南の人々の生活圏の一部になっている。

1. 気 象

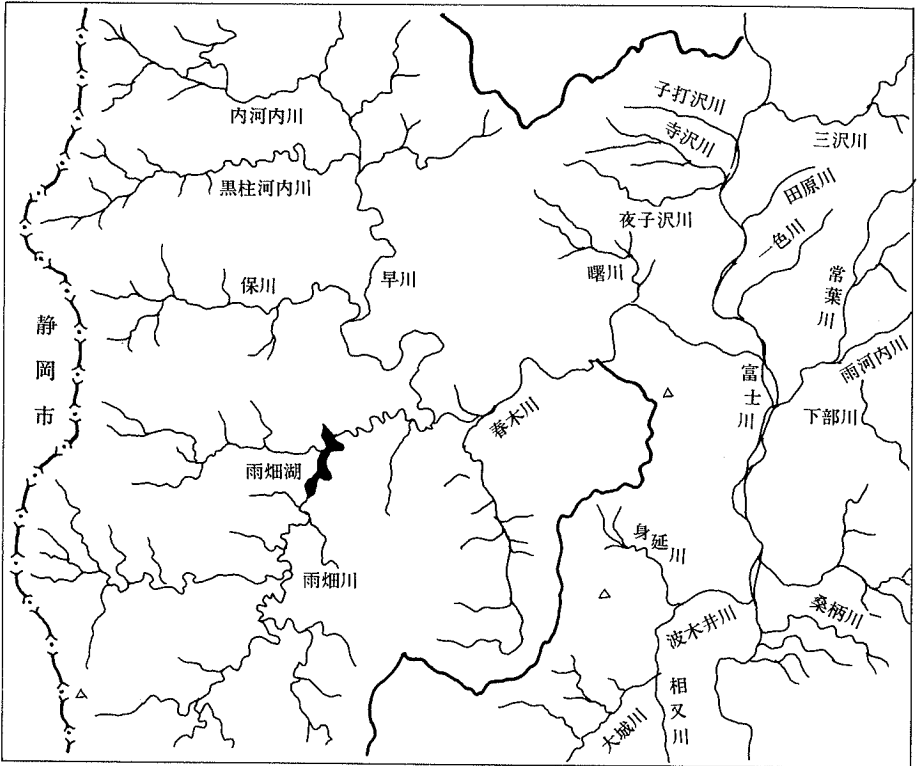
山梨県全体は、周囲を日本アルプスを始めとする高峻な山岳に囲まれているため、典型的な内陸気候であり、冬は寒さが厳しく、また夏は非常に暑い。その中において本地域は、駿河湾からの影響も受けて比較的温暖で、降雨量も多く樹木の成育に適し、この気候を利用して昔から針葉樹木の植林が盛んである。

第3表 甲府気候表(1931～1960年)

要 素	単位	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全 年
気圧(現地の値)	mb	982.4	983.1	982.3	981.9	979.9	977.2	977.2	978.5	981.0	984.8	986.4	984.7	981.6
平均気温	℃	1.5	2.7	6.8	12.2	19.6	21.0	25.2	25.6	21.7	15.2	9.5	3.9	13.5
最高気温(平均)	℃	8.6	9.7	14.0	19.5	24.0	27.1	30.9	31.8	27.5	21.7	16.5	11.1	20.2
最低気温(平均)	℃	-4.3	-3.2	0.6	5.9	10.8	16.4	21.4	21.6	17.7	10.4	3.9	-1.8	8.3
平均降水量	mm	37.9	48.9	71.9	85.2	89.9	139.6	142.7	155.9	188.1	136.6	67.3	43.2	1,207.3
平均風速	m/s	2.9	2.8	3.4	3.0	2.4	2.2	2.1	1.8	1.8	1.7	1.8	2.4	2.4

(甲府地方気象台)

第3図 主な屋根と河川図



2. 就業構造

地域の大半が山林であるため、昔から林業が重要な基幹産業であり、また、僅かな土地を利用して、水田・畑作等も行われており、就業構造においては、昔から第一次産業の占める割合が高かった。

しかし、近年、南部工業団地の造成や、身延町や下部町における観光業の活発化等により、第二次、第三次産業への就業者数が増加し、第一次産業への就業者数は過疎化の進行と共に減少している。

第4表 就業者数(昭和60年度国勢調査)

市 町 村	総 数 (人)	第1次産業		第2次産業		第3次産業		分類不能産業	
		実数 (人)	構成比 (%)	実数 (人)	構成比 (%)	実数 (人)	構成比 (%)	実数 (人)	構成比 (%)
鯉 沢 町	2,701	219	8.1	1,133	42.0	1,343	49.7	6	0.2
六 郷 町	2,485	282	11.4	1,095	44.0	1,106	44.5	2	0.1
中 富 町	2,907	503	17.3	1,229	42.3	1,172	40.3	3	0.1
早 川 町	1,395	269	19.3	531	38.1	595	42.6	0	0
下 部 町	4,196	838	20.0	1,506	35.9	1,846	44.0	6	0.1
南 部 町	3,284	282	8.6	1,593	48.5	1,406	42.8	3	0.1
身 延 町	4,608	339	7.3	1,702	37.0	2,566	55.7	1	0.0
計	21,576	2,732	12.7	8,789	40.7	10,034	46.5	21	0.1

3. 交 通

富士川水運は、1607年に京都の商人、角倉了以が、徳川幕府の依頼を受けて、
鰻沢から岩淵（静岡県富士川町）までの約72kmの富士川を改修し、山国である山
梨県と東海道筋を結んだものであり、江戸時代から明治期までこの付近の重要な
交通路であった。

1908年の富士川水運の廃止後は、明治9年に建設された国道52号線、及び昭和
13年に開通した富士身延鉄道（現在のJ R身延線）がこれに取ってかわり、現在
に至るまで地域住民の足として重要な役割を果たしている。

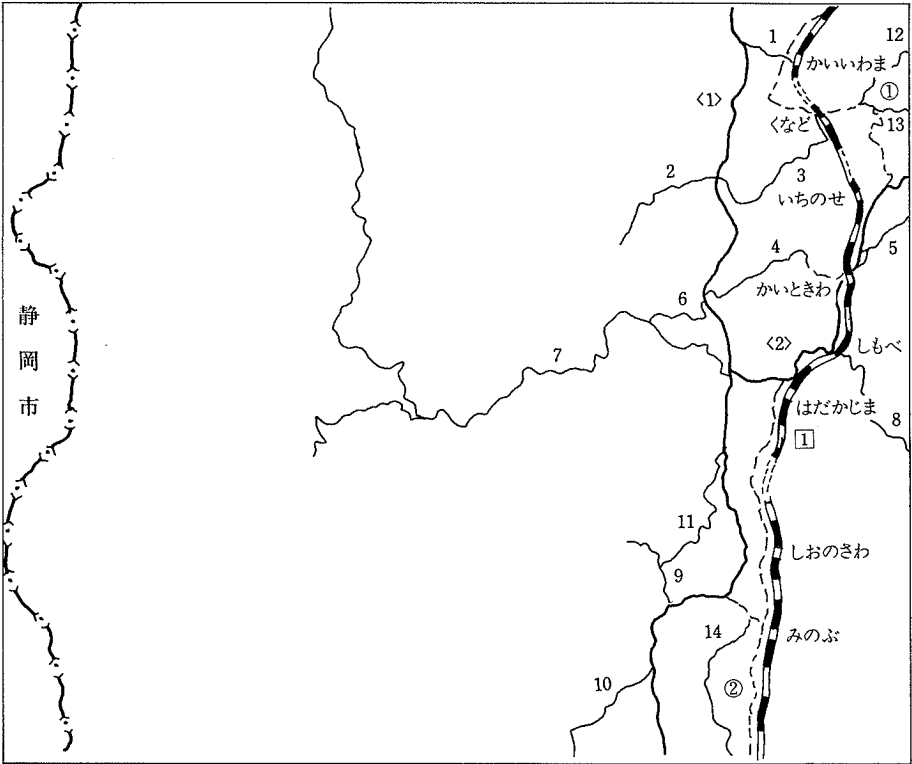
鉄 道 ① J R 身延線

一般国道 <1> 52号線 <2> 300号線

主要地方道 ① 市川大門・下部・身延線 ② 富士川・身延線

- 一般地方道
- | | |
|----------------|--------------|
| 1. 甲斐岩間(停)西島線 | 2. 賭静川線 |
| 3. 割子・中富線 | 4. 下部・飯富線 |
| 5. 栃代・常葉線 | 6. 粟倉・飯富線 |
| 7. 野呂川・波高島(停)線 | 8. 湯之奥・上之平線 |
| 9. 身延線 | 10. 大城・小田船原線 |
| 11. 身延・本栖線 | 12. 山保・久那土線 |
| 13. 古関・割子線 | 14. 清子・大野線 |

第4図 交通網図



Ⅳ 主要産業の概要

1. 林業

この地域は、年間平均気温が高く、降雨量にも恵まれているため、スギやヒノキ等の植林が盛んで、林業はこの地域の重要な基幹産業であった。

しかし、過疎化に伴う労働力の不足や木材価格の低迷といった問題を抱え、現在林業経営は伸び悩んでいる。1977年には、南部町・身延町・富沢町の3町から成る、「富士川林業銘柄期成組合」が結成され、木材の品質向上と林業の活性化を目指している。

2. 農業

昔からこの地域では、富士川やその支流流域の僅かな平地や、山腹を利用した傾斜地で零細な畑作や桑園が営まれていた。しかし、耕地面積が狭いため、古くから大工などの職人としての出稼ぎや行商が多く、兼業農家が大半であり、現在はその傾向が一層進んでいる。

図幅の南部では、暖地性の気候を利用して、近年、茶やミカン等も栽培されるようになり、特に茶については、1967年頃から換金作物として栽培され「やぶきた」などの優良品種を導入したり、共同作業所で新しい技術や機械を導入して生産を行う等、品質の向上に努め「南部茶」「甲斐の緑」の名で、県内を始め東京市場にも出荷している。

農地には、その他、竹林があり竹材とともにタケノコの生産が盛んである。また、椎茸なども栽培されている。

3. 観光業

富士川右岸の身延町身延には、日蓮宗の総本山である久遠寺があり、国道52号線に沿う総門から三門までの約1.5 kmの間に門前町が発達し、付近には諸堂や宿坊が多く見られ、日蓮宗の信徒を始め、多くの観光客で賑わいを見せている。

下部町の下部温泉は、下部川に沿う国民保養温泉で、泉温32.6℃の低温アルカリ性単純泉である。古くから「信玄公の隠し湯」として骨折や胃病などの療養の

湯治客が多い閑静な温泉で、特に夏期の利用客が多い。

この他、早川町では、古い歴史と民芸伝承地として有名な奈良田湖や西山温泉、七面山参拝の登山口角瀬、甲州金山や雨畑湖また、東海自然歩道など自然景観を生かした観光地が有名である。

第5表 農家戸数及び耕地面積

区分 市町村名	農家戸数(戸)			耕地面積(ha)					耕地率 (%)	林野面積 (ha)
	業	兼業	合計	田	普通畑	樹園地	牧草地	計		
鯉沢町	50	306	356	40	19	52	-	111	2.3	3,994
六郷町	69	434	503	52	33	43	-	128	9.6	644
中富町	211	665	876	112	57	81	-	250	5.8	2,872
早川町	144	366	510	28	38	45	-	111	0.3	36,005
下部町	198	898	1,096	99	45	123	-	267	2.0	10,762
南部町	72	773	845	135	25	92	-	252	2.2	9,790
身延町	122	987	1,109	155	50	51	-	256	2.0	10,725
計	866	4,429	5,295	621	267	487	-	1,375	1.6	74,792

資料：山梨県農林水産統計年報(昭和62年度版)

第6表 農業粗生産額

単位：百万円

区分 市町村名	生 産 業 粗 額	耕				種				養蚕	畜				産		農加 産 物 工
		計	米	麦 穀 類	いも類 及び 野 菜	果実 及び 花き	その他	計	肉用牛		乳用牛	豚	鶏	その他			
鯉沢町	168	82	36	4	27	13	2	35	51	-	-	-	51	-	-	-	-
六郷町	144	113	55	55	5	38	12	3	24	7	-	7	7	-	-	-	-
中富町	271	182	99	90	12	60	14	6	40	48	6	39	1	1	1	1	1
早川町	396	98	16	16	6	42	15	19	6	290	-	-	7	2	2	2	2
下部町	534	195	92	92	9	69	11	14	75	262	-	-	2	2	2	2	2
南部町	426	348	128	128	9	56	13	142	7	66	-	-	-	-	-	-	-
身延町	388	261	145	145	12	56	16	32	23	101	-	3	3	-	-	-	-
計	2,327	1,279	1,279	562	57	348	94	218	210	825	6	49	10	13	13	13	13

資料：山梨県農林水産統計年報（昭和61年度版）

第7表 工業統計及び商業統計

単位：人、百万円

区分 市町村名	事業所数	従業員数	製造品 出荷額	商店数	従業員数	年 販 額	間 売 額
六郷町	39	480	530,733	128	403	649,843	649,843
中富町	37	559	389,569	130	311	425,588	425,588
早川町	3	55	16,340	44	75	39,649	39,649
下部町	35	323	282,292	157	384	474,495	474,495
南部町	42	1,013	2,156,132	114	352	351,433	351,433
身延町	25	641	1,225,118	238	606	760,599	760,599
計	200	3,886	6,291,547	943	2,501	3,213,074	3,213,074

資料：昭和62年工業統計調査結果報告
昭和60年商業統計調査結果報告
(注) 「事業所数」・「従業員数」・「製造品出荷額」は4人以上の事業所である。

各論

I 地形分類図

1. 地形概説

調査図幅地域は大きく見れば、赤石山地と天子山地、および両山地を分ける富士川河谷に分けられる。富士川谷底部では平野の発達が悪く、全体としては山地斜面の占める範囲が広い。

山地はいずれもほぼ南北方向の主稜線を持つ。調査図幅内の最も西側の稜線は、間ノ岳から農鳥岳を経て南へ続くもので、西側斜面は大井川の流域に含まれる。稜線高度は一般に2300～2400mで、最高所は筑ヶ岳の2629m、最低鞍部は図幅北西辺の転付峠の約1970mである。この山地の東側には、早川、雨畑川の深い谷をはさんで、富士見山および七面山が続く。富士見山の最高所は1640m、稜線高度は1500m前後、七面山のそれらは、それぞれ1982m、1800m前後であり、西側の筑ヶ岳を含む稜線より500m前後低い。

富士見山、七面山の東側は、前者が高度400～500mのやや丘陵的な地域であるのに対し、七面山の東側は春木川の谷をはさんで身延山から鷹取山にかけての高度1100～1000mでいどの稜線高度を示す山地である。

富士川河谷より東側は天子山地で、最高峰の毛無山(1946m)や雨ヶ岳(1772m)を含むほぼ南北方向の主稜線は図幅よりさらに東側にある。このため、調査図幅内の天子山地は、その西側斜面にあたり、稜線は東西方向を示すものが多い。高度はほぼ1000m以下(図幅南東端付近では1100mを越えている)である。

山地斜面はいずれも急勾配であるが、とくに、早川～春木川より西側の山地では40°以上の急勾配斜面が支配的である。早川より東側の富士見山では、全体としては30°以上の急勾配斜面から成るが、40°以上の範囲がやや減少する。身延山～鷹取山では、この傾向はさらに著しく、逆に30°～20°の勾配の斜面も目立つようになる。天子山地は、富士見山、身延山とほぼ同様である。富士見山の東側の丘陵性の地域は20°～30°の勾配の斜面が支配的である。

河川は、主要なものは、主稜線と平行する南北方向に流れ、それらに合流する小さい支流は東西方向のものが多い。早川は下流の富士川との合流点近くでは東西に流れ、南北性の富士見山～身延山山地を先行的に横切っている。河床は広く、

粗粒な礫から成り、谷底部の平地の発達は極めて悪い。一方、天子山地から流下する2～3の河川の下流域には、比較的広い平地が分布する（たとえば、甲斐岩間付近）。

上記の地形の特徴は、地質および地質構造に支配されている点が多い。図幅内では、早川～春木川の谷は、ほぼ糸魚川―静岡構造線にあたり、これより西側は古第三系、中生層より成るのに対し、東側は新第三系である。さらに、富士見山の東側急斜面はいわゆる富士見山断層崖（大塚，1941）であり、東へ衝上している。東側の丘陵性の地形が発達する地域は、新第三系のなかでも、最も新しい曙礫岩層の分布地域に一致している。

調査地域の水系は、策ヶ岳を含む最も高い主稜線より西側が大井川水系に入るほかは、すべて富士川水系に属する。やや細かくみれば、富士見山の稜線は富士川と最大の支流である早川の水系を分けている。早川のさらに支流である雨畑川、春木川の流域は七面山および身延山―鷹取山の稜線によって分水界を決められている。地形分類図では、これらは主要分水界として示されている。

2. 地 形 区

空中写真判読と野外調査に基づき、地形分類を行なった。地形の連続性、起伏のていど、地形を作る物質、形成に関与した作用を基準にし、かつ地形の地域的なまとまりを考慮して次のような地形地域を設定した。なお、山間の谷底平野や土石流性の小規模平坦地などは、小規模であり、しかも点在するため、図の煩雑さを防ぐ意味ですべてを地形地域区分図に記入することはさけた。

3. 地 形 詳 説

I. 山 地

山地の地形表現は、斜面勾配を分級して表現した。それらは15°未満、15°～30°、30°～40°、40°以上の4段階である。これらの図上での表現は色の濃淡によるものとし、茶色を使用した。色の濃い方が急勾配斜面である。

この基本的な山地斜面分類とは別途に、山頂、山稜、山腹の平坦面および顕著な凸型緩斜面、凹型緩斜面を表わした。また、赤石山地は崩壊の地形が極めて顕

I 山地	a. 赤石台地	1. 笹ヶ岳山地 2. 七面山山地 3. 身延山山地 4. 富士見山山地 5. 平須丘陵性山地
II 低地・台地	a. 富士川河谷平野 b. 早川河谷平野 c. 天子山地河谷平野	1. 谷底平野 2. 段丘 1. 谷底平野 2. 段丘 1. 谷底平野 2. 段丘

著で、山地地形の発達や、防災の点でも意味が大きいと考え、可能な限り図化することにした。

以上のような山地斜面の地形分類図は、山地斜面上でみられる様々な地形現象と斜面勾配（さらには等高線に基づいて判読できる絶対高度、比高など）とのみかけ上の関係の有無を考える資料となろう。

山地の地形地域区分は、大別すれば、赤石山地（Ia）と天子山地（Ib）に分けられる。さらに、早川～雨畑川より西の笹ヶ岳山地（Ia1）、雨畑川～糸魚川・静岡構造線（春木川）間の七面山山地（Ia2）、その東側～富士川間の身延山山地、（Ia3）、早川～富士見山断層間の富士見山山地（Ia4）、その東～富士川間の平須丘陵性山地（Ia5）、および富士川より東側の天子山地（Ib）に分けられる。

Ia. 赤石山地

笹ヶ岳山地（Ia1）は笹ヶ岳（2629m）を最高峰とし、東側は早川および雨畑川の深い谷によって限られる。主稜線が南北方向であるのに対し、支稜線は東西方向を示し、ほぼ3km間隔ごとに並んでいる。斜面の勾配は急で、40°以上の山地斜

面は全体の50～60%を占める。30°以上では90%にも達し、20°～30°、あるいはさらに緩勾配の斜面は、ほとんど点在するにすぎない。

地質は稜線とその周辺では白亜系の小仏層群から成り、東へ古第三系・三倉層群、瀬戸川層群下部と順次上位の地層が露出する。それぞれ断層で接しているが、全体の構造は南北方向であり、山地の主要な方向と調和している。

策ヶ岳山地には、中規模の崩壊地形が著しい。空中写真では、明瞭な滑落崖が容易に判定され、滑落崖上縁の長さは1～1.5kmのものが多い。地形の新鮮さから判断して、いずれも完新世に発達したと考えてさしつかえない。いくつかの崩壊地では崩落物質が残り、相対的に緩勾配の山地斜面を形成している。

主稜線付近には、スムーズな山地斜面が分布し、とくに西側の静岡県側斜面では広く発達する。これらは、現在植生に覆われており、氷河期の森林限界低下によって裸地化した山地斜面上で働いた周水河作用によるものと推定される。

七面山山地 (Ia2)は、七面山 (1982.4m) を最高点とし、東側を糸魚川―静岡構造線に一致する春木川の谷に限られる。七面山の山頂には広い小起伏面が発達し、重力性の断層が数本認められる。

策ヶ岳山地に比べれば、40°以上の勾配の山地斜面はやや狭くなるものの、ほとんどが30°以上の急斜面から成る。

七面山山地でも中規模の山地崩壊は多いが、とくに七面山の東側および西側では山頂の平坦地に達している新鮮な崩壊地がみられる。

地質は古第三系・瀬戸川層群であり、西から東へ下部、中部、上部と順次上位の地層が分布し、その構造はここでも主稜線の方角と一致している。

身延山地 (Ia3)は、春木川の谷と富士川本流の谷の間の山地である。しかし、春木川最上流部から分水嶺を越えて波木井川上流 (大城川) にかけての山地では、糸魚川―静岡構造線と地形の対応は明らかでない。ここでの山地地域地形の区分は便宜的である。

身延山地は身延山 (1153m) と鷹取山(1036m)の二つの山頂緩斜面から成る山頂により特徴づけられる。地質は主として新第三系・富士川層群、一部にはより下位の御坂層群から構成され、これらに石英閃緑岩、閃緑玢岩が貫入している。身延川～波木井川～相又川の谷も断層に沿って発達したと考えられる。

この山地では、斜面勾配 40° 以上の斜面は点在するようになり、 $30^{\circ}\sim 40^{\circ}$ の勾配の斜面が支配的である。また、 $20^{\circ}\sim 30^{\circ}$ の勾配の斜面もかなり分布するようになり、明らかに前述の二つの山地とは山地斜面の地形が異なる。富士川河谷に面する山地東側斜面では地すべり地形が顕著である。身延町の山地頂部、斜面上の耕地の多くは地すべりと関係して成立していると思われる。

富士見山山地 (Ia4) は、甲府盆地の西縁を限る巨摩山地の南部にあたり、御殿山 (1669m)、富士見山 (1639m) の二つの山頂が図幅内にある。山地の両側は顕著な断層で限られる。西側は糸魚川—静岡構造線で、ほぼ早川の谷に一致している範囲が広い。しかし、図幅北端では茂倉から巨摩山地の西側斜面へ出て、さらに夜叉神峠西を経て鳳凰山地の東—北東斜面を限る。すなわち、地質的断層と山地地域を区分する大きな谷地形とは一致していない。東側は富士見山断層によって地形的にも明瞭に区分される。ここでは、土石流起源の段丘化した地形が変形しており、活断層、活褶曲によるものである。

山地斜面の勾配については、 40° 以上の占める範囲は策ヶ岳山地や七面山山地ほど広くないものの、身延山地よりはるかに広い。 30° 以上の占める範囲まで含めると、山地斜面の多くはその勾配になる。しかし他方では $20^{\circ}\sim 15^{\circ}\sim 8^{\circ}$ のかなり緩勾配の斜面が点在することが特徴である。そのうちのいくつかは、崩壊した物質がそのまま下方に残っているためである。

地質は南部の一部が新第三系上部の富士川層群、茂倉付近の一部が古第三系瀬戸川層群であることを除けば、すべて新第三系下部の御坂層群・楡形山累層、桃の木累層である。

平須丘陵性山地 (Ia5) は、これまでに記述した山地とは地形的にかなり異なる。まず第1に高度は最高644 mで、概して400~450mでいどであること、第2に谷沿いの急斜面を除けば $20^{\circ}\sim 30^{\circ}$ の山地斜面勾配であること、第3に、平須や大塩のように、尾根の一部は平坦な堆積面を残していること（したがって古くからの集落がある）などをあげることができる。このような特徴は、この山地は新第三系・富士川層群最上部のいわゆる曙礫岩層から成っていること、および、地形発達史の点では、富士見山断層の活動とともに、その山麓の扇状地の発達—全体の隆起—谷の発達すなわち丘陵化、という経過を新しい地質的過去に経験して

きたことに由来するのであろう。

ここでは上述のように、相対的高所に平坦地の発達が良い。平坦地は、さらに谷底部でも他の山地に比べれば広い。谷底部では水田が多いことと併せて、相対的に軟弱な地質の影響を受けていると思われる。

Ib. 天子山地

図幅内の天子山地には、その主稜線は含まれておらず、西へ下がる支稜線の一部にすぎない。地形的には、常葉川より北側の山地（ただし醍醐山を除く）は山頂高度400～450mによくそろっており、むしろ上述の平須丘陵性山地に似ている。しかし、地質的には御坂層群中・上部も含まれるものの、多くは下部の楡形山累層、桃の木累層から成り、平須丘陵性山地とは異なる。むしろ、後述のように山地の高度が大きく、急勾配の斜面から成る常葉川以南の山地の方が、より新期の富士川層群下～中部から成る。すなわち、天子山地では、地質の新旧関係と山地斜面の地形（とくに斜面勾配の程度とその分布、山地高度）については、新しい地層の山地の方が、高く、急峻であるといえよう。このことは、富士川より西側の赤石山地とは逆である。山地の地形と地質との間のみかけ上の対応関係の意味は単純には解釈できないが、天子山地と赤石山地が隆起し、山岳となる過程において、それぞれ相互の影響を受けつつも、個々に特徴的な隆起運動を行ってきたことを示しているのではなかろうか。

山地斜面の勾配については、常葉川より北では 20° ～ 30° の斜面が支配的で、 15° ～ 20° の斜面をかなり広く混じえるのに対し、常葉川以南では、 40° 以上の急斜面の点在する 30° ～ 40° の勾配の山地斜面が支配的である。この常葉川以南の天子山地の地形は、斜面の傾斜分布の点からは、身延山山地に似ている。この事実は、上述の平須丘陵性山地と常葉川以北の山地が地形的に類似していることと併せて、興味深い。すなわち、富士川に近い山地の地形は、侵食の基準高度を富士川によって決められてきたため、同じような谷—山地斜面の発達過程を受けたことが推測される。富士川谷の地形発達を考える際の一つの視点となろう。なお、常葉川以北の山地斜面には集落が相対的に密に立地し、地すべりが耕作を可能な土地条件を作り出していることを示している。

II. 低地・台地

低地の地形については、単位地形に基づく分類を重ねて、地表面の勾配を黒の細線模様で示すことを原則としている。勾配の分級は 15° 以下の地域について、 8° 、 3° 、 $\frac{1}{2}^{\circ}$ 、 $\frac{1}{4}^{\circ}$ が境界値である。 $\frac{1}{4}^{\circ}$ の境界値は2万5千分の1地形図の2.5 mないし1.25 mに基づくことが望ましい。本図幅ではこれらの等高線は含まれていないので、 $\frac{1}{4}^{\circ}$ 以下の勾配の範囲を決めることは困難である。5 m等高線による $\frac{1}{2}^{\circ}$ の範囲から判断する限り、 $\frac{1}{4}^{\circ}$ 以下の範囲がまとまって分布することはないと思われる。

本図幅内には、まとまりをもった広い低地は分布せず、ほぼ谷底部の限られた範囲に小規模に発達するにすぎない。本流、支流ともに、連続性の悪い段丘が分布するが、独立した地形地域区分を与えるほど発達はよくない。したがって、低地・台地を一括して地形地域とした。

本図幅内の低地・台地の地形地域区分は、富士川河谷平野 (IIa)、早川河谷平野 (IIb) 天子山地河谷平 (IIc) とした。

II a, 富士川河谷平野

富士川の河床は広く、谷底部はほとんど河床であると言っても過言ではない。不連続的に分布する谷底の土地利用された平野部分 (IIa1) も提防によって守られているためであって、新鮮な地表面の微地形は、最近まで河床であったことを示している。ただし、甲斐岩間周辺、大木地区周辺のように、支流の谷がやや広く、しかも支流の砂礫運搬量があまり多くない所では、相対的に低湿な氾濫平野が分布する。この地形は、本流の富士川が、支流谷底へ逆流したために発達したのであろう。

河岸段丘 (IIa2) は、断片的に分布する。多くの場合、段丘面は本流に向かって傾き下がり、支流性の堆積物から成ると推定される。身延町波木井地区には河岸段丘状の平坦地が分布するが、高度変化が大きく、地すべり地形であらう。

II b, 早川河谷平野

早川の谷底平野 (IIb1) は、富士川沿いよりさらに貧弱である。谷底部の大半は、現河床であり、谷底平野も相対的に長期間、河床になっていないにすぎない。段丘地形も断片的であり、むしろ、土石流起源の急勾配沖積錐の発達が著しい。

IIc. 天子山地河谷平野

天子山地では、河谷平野も常葉川の北と南で性格が異なる。南では、谷底平野がほとんど発達せず、土石流起源の堆積物の作る地形が支配的である。これに対し、北の山地では、川の大きさに比べて、谷底低地（IIc1）の発達が良い。河川の縦断勾配も相対的に緩い。さらに、常葉川に沿っては段丘（IIc2）の発達がやや顕著である。

4. 起伏量

5万分の1地形図「身延」および「赤石岳」の山梨県内の地域について、図幅の各辺を20等分して得られるすべてのメッシュについて、最高点と最低点の標高差を求め、これを起伏量とする。これらの値を50m以下、50～100m、100～200m、200～400m、400m以上の5段階に区分し、起伏量の小さい方からそれぞれ1、2、3、4、5の数字で表現して起伏量図とした。

起伏量は単位面積あたりの地形の急峻さ、平坦さを表現する。

図幅全域を概観した時の特徴は、起伏量が400m以上（5）の範囲が圧倒的に広いということであろう。傾斜分布においては、かなり差がある筑ヶ岳山地とその他の山地との間にも起伏量の相違は表現されない。これは起伏量の絶対値が同様であることを意味するわけではなく、区分のしかたによるところが大きい。この区分で有意な起伏量差が出るのは、平須丘陵性山地（Ia5）と、天子山地のうちの常葉川より北側の山地である。これらの山地では、起伏量は主として100～200mである。

起伏量は富士川河谷（IIa）や早川河谷平野（IIb）の地域でも、ほとんど100～200mないしそれ以上であり、100m以下、50m以下の範囲はわずかに点在するにすぎない。これは、河谷の幅が狭く、メッシュの枠に山地斜面がかかることを示し、谷底平野の発達が悪いことを意味している。しかし、富士川河谷では、平坦さは起伏量として表現されないが、周辺山地より確実に小さな値を示す。これに対して主な支流である、早川、雨畑川、春木川の河谷では、わずかな範囲で、400～200m（4）の起伏量であるが、ほとんど周辺山地の起伏量（5）と変わらない。これは、これらの河谷が急峻な幅の狭いV字状の横断面形を示すことを表

わしている。

(吉村 稔, 平川一臣)

身延 起伏量 図

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v
A			5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	3	4	3	3	3	4
B			5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	3	4	2	1	3	4
C			5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	3	3	3	3	3	4
D			5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	3	3	3	4	4	3	4
E			5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	3	3	3	3	3	3	3
F	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	3	3	4	3	4	3	3	4
G	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	3	3	4	3	4	4	3	4
H			5	5	5	5	5	5	4	4	5	5	5	5	4	4	4	3	4	4	4	5
I			5	5	5	5	5	5	5	4	5	4	4	5	4	4	3	1	4	4	4	5
J			5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	5	4	4	5	4	3	4	4	4	5
K			5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	4	4	5	4	5	3	2	5	4	5
L			5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	4	2	5	5	5
M	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	5	4	5
N	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	3	5	5	4
O	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	3	5	5	5
P	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	4	4	5	5
Q			5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	4	5	4	4
R			5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	3	3	5	4	5	
S			5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	3	4	5	5	5	
T			5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	4	5	4	3	3	5	5	5	

1 : <50m

4 : 200m~400m

2 : 50~100m

5 : >400m

3 : 100m~200m

II 表層地質図

本図幅の西側は、南アルプスと呼ばれる赤石山地、中央部は巨摩山地、東側は天子山地となっている。いずれも山嶺が南北に連なり、赤石山地は、標高3,000 mに近い高嶺よりなっている。

北より策ヶ岳(2,629m),布引山(2,583.7m),青笹山(2,208.9m)が図幅の西縁に南北に連なる。

図幅中央の巨摩山地は、御殿山(1,669.9m),富士見山(1,639.5m)が早川北側の山地であり、早川南側では、身延山(1,153m),鷹取山(1,036.1m)の山嶺が南北に連続する。

図幅の東側は、隣接富士山図幅中に南北に連なる天子山地の西斜面である。

河川は山嶺に平行して北より南に流れ、図幅中央の富士川は、甲府盆地南端で釜無川と笛吹川の合流したもので、図幅中の最大河川である。この合流点より南を地理学上、富士川とよんでいる。

図幅内の河川はすべて富士川に合流するが、その内最大のもは早川であり、赤石山地と巨摩山地の境界を南流し、急峻な谷壁をもった峡谷をつくっている。その他、巨摩山地に源流をもつ支流としては大枅川で、図幅の北縁で富士川と合流している。天子山地に源流をもつものとしては、枳代川が西流して図幅の中央部で富士川と合流している。これらは、主要河川で、この他に数多くの支流が巨摩山地、天子山地に源流をもって富士川に合流している。また早川は、富士川の支流であるが赤石山地に源流のある数多くの支流をもっている。

地質は、図幅西側の赤石山地では先新第三紀四万十層群より構成され、図幅中央の巨摩山地は、新第三紀中新世御坂層群より構成されている。この両山地は早川に沿って南北に連続する、糸魚川・静岡構造線によって境されている。この糸魚川・静岡構造線より東側は、フォッサマグナと呼ばれる地帯で、日本列島を横切る底地帯の一部で後アルプス造山運動地帯でもある。フォッサマグナにはグリーンタフ(緑色凝灰岩)を代表とする堆積物がみられる。

富士川左岸の天子山地西斜面には、グリーンタフ変動の終末期の地質斜運動の結果、堆積した厚い礫岩層が露出する。

富士川、早川の河床には、第四紀沖積世の厚い礫層が堆積し、また早川の支流との合流点には扇状地が発達する。

I 未団結堆積物

I-1 沖積堆積物

富士川および早川が図幅内の主要河川であるが、この河川の河床には沖積堆積物の砂礫層が厚く堆積し、その層厚は30mをこえる部分が多く、特に富士川・早川合流点では、河幅も広がり盆地状を呈し、砂礫層の厚さは50mを越えている。

富士川・早川とも支流との合流点には扇状地がみられ、特に早川の赤石山地からの支流では、扇状地の発達が顕著である。また、その層厚は30mを越えている。

早川沿岸では、先新第三紀四万十層群露出地帯であり、急斜面が多く、斜面下には厚い崖錐堆積物がみられる。層厚は10m以上である。

II 半団結堆積物

II-1 ローム層

各山地山頂には、ローム層の堆積がみられる。また、堆積後流出して再堆積した二次堆積ローム層がみられる。

III 団結岩

図幅の西縁の赤石山地には、先新第三紀四万十層群に属する千枚岩、硬質砂岩互層千枚岩が露出する。

巨摩山地には新第三紀御坂層群に属するグリーンタフ変動帯に属する玄武岩質緑色凝灰岩、変朽安山岩、石英安山岩質凝灰岩、溶岩流、泥岩、砂岩が露出する。

御坂層群と四万十層群は、早川に沿って南北に連続する糸魚川・静岡線によって境されている。

図幅の東側区域の富士川沿岸、および天子山地西斜面は新第三紀中新世の御坂層群と、新世の富士川層群より構成される。御坂層群は、巨摩山地区域と同様の岩相を示すが、富士川層群は礫岩を主とし、少量の砂岩を伴っており、グリーンタフ変動終末期の地質斜運動によるモラッセ型礫岩層である。

IV 地質層群

第四紀	沖積世	河床堆積物	
第三紀	鮮新世	富士川層群	礫岩・砂岩
		上部御坂層群	石英安山岩質凝灰石・溶岩流
	中新世	中部御坂層群	泥岩・砂岩互層
		下部御坂層群	玄武岩質凝灰角礫岩 変朽安山岩
	四万十層群	千枚岩(粘板岩)硬質砂岩互層 千枚岩(粘板岩)	

V 温 泉

富士川沿岸下部町には、温泉が湧出する。温泉井は3ヶ所掘削されており、泉温は25℃～30℃の低温温泉である。

VI 資 源

早川の草塩付近では四万十層群中より天然ガスが湧出し、その一部が利用されている。

参考文献

- 浜野一彦他 (1970) : 山梨県地質誌 山梨県
浜野一彦 (1972) : 山梨県土地分類調査20万分の1 山梨県
浜野一彦 (1974) : 甲府構造線および富士八ヶ岳構造線 山梨大学教育学部No.5
浜野一彦 (1981) : 土地分類基本調査(富士山) 山梨県
浜野一彦 (1982) : 土地分類基本調査(山中湖・秦野) 山梨県
浜野一彦 (1984) : 土地分類基本調査(甲府) 山梨県
浜野一彦 (1987) : 土地分類基本調査(鰍沢) 山梨県

Ⅲ 土 壤 図

耕地の土壤

本地域に分布する土壤は、褐色森林土、黄色土および灰色低地土などが広く分布し、僅かに黒ボク土およびグライ土も分布する。

褐色森林土は赤褐色系が主であるが、一部黄褐色系の分布もみられる。分布する土壤の特徴は次のとおりである。

1. 黒ボク土壤

この土壤は、黒色ないし黒褐色（土色の明度、彩度とも2以下）の腐植に富む厚さ50cm程度の火山灰土層で下層は腐植含量が少なく褐色を呈する。土性はおおむね粘質である。

本図幅内では南部地内の山頂に小面積分布し、普通畑として利用されている。

2. 褐色森林土壤

この土壤は、赤褐色系および黄褐色系があるが、いずれも強粘質で粘性、可塑性が強く全層の腐植含量は少ない。

赤褐色系に属するものには、岳辺田統および小坂統があるが、岳辺田統は、全層に角礫が富み、山間の急傾斜面に分布し、主に桑園等に利用されている。小坂統は礫含量が少なく、山間の比較的緩斜面に分布し、桑園および果樹園等に利用されている。

黄褐色系に属するものには、石浜統および赤山統があるが、石浜統は岳辺田統と同様に山間の急傾斜面に分布し礫含量に頗る富み、主として桑園に利用されている。

赤山統は、礫含量が少なく、小坂統と同様に山間の緩斜面およびやや平坦地に分布し、桑園および果樹園等に利用されている。

これらの土壤統は、本図幅内の全域に分布し、畑、樹園地の大半を占めている。

3. 黄色土壌

この土壌は腐植含量が少なく、下層土の色が主に黄～黄褐色を示す土壌である。これに属するものは、都志見統および氷見統がある。

都志見統は粘質であるが、氷見統は強粘質で、いずれも可塑性は大きい土壌で水田利用によるかんがい水の影響による斑紋がある。

都志見統は富士川右岸の比較的平坦地に、氷見統は同じく富士川右岸の山間窪地に分布し、水田としての利用が多い。

4. 細粒灰色低地土壌

この土壌は、河成沖積低地に分布し、表層は灰色であるが、下層は黄褐色を呈する。土性は表層は強粘質であるが、下層は壤質である。

これに属する東和統は、富士川支流の常葉川および田原川等の沿岸周辺に分布し、水田として利用されている。

5. 粗粒灰色低地土壌

この土壌は河成沖積低地に分布し、表層は灰色であるが下層は黄褐色を呈する。土性は、壤質か、あるいは砂質で礫層が浅い位置から表われる土壌である。

これに属する追子野木統は富士川兩岸の平坦地に分布し、水田として利用されている。

6. 細粒グライ土壌

この土壌は河成沖積低地に分布し、全層が灰色を呈し、強粘質の土壌である。これに属する保倉統は作土下がグライ層となり、礫を含み地下水位も比較的高い。本図幅内では六郷地内の富士川左岸に小面積分布し主に水田として利用されている。

7. 粗粒グライ土壌

この土壌は河成沖積低地に分布し、表層にグライ斑が存在し、全層または表層が壤質かあるいは砂質である。

これに属する八幡統は表層にグライ斑が認められるが下層は砂質でグライは存在しない。本図幅内では六郷地内の富士川左岸に小面積分布し主に普通畑として利用されている。

山地及び丘陵地の土壌

1. 黒ボク土壌

A層は黒色ないし黒褐色の腐植に富む火山灰土で、厚さは25～50cm、B層は腐植の少ない基岩の風化物が見られ、礫質なB-C層に移行する。これに属する土壌統としては身延1統で、七面山、相又から派生した屋根の先端部の凹地形のところにごく小面積ながら分布しており、主にヒノキ人工林として利用されている。

2. 乾性褐色森林土壌

褐色森林土壌のうちBA、BB、BC型に相当する土壌で、A0層はF、H層が発達している。A層は黒褐色～暗褐色でB層との境は割合ははっきりしている。土壌中に菌糸をみることがある。これに属する土壌統としては南部1統、下部1統、身延2統、早川1統である。分布域は尾根筋から山腹上部にかけてみられる。主として天然広葉樹林及びヒノキ、アカマツ、カラマツ人工林が生育している。

3. 褐色森林土壌

褐色森林土壌のBD(d)、BD型に相当する、いわゆる適潤性土壌である。A0層はほとんどなく、A層は黒褐色で団粒状構造がよく発達しており、腐植に富んでいる。層位は厚く、B層との境は判然としなない。これに属する土壌統としては南部2統、下部2統、身延3統、早川2統である。これらの各統は山腹中部から山脚部にかけて広く分布しており、主にスギ、ヒノキ、アカマツ、カラマツの人工林として利用されている。

4. 湿性褐色森林土壌

褐色森林土壌のうちBE、BF型に相当する土壌である。A0層はなく、A層は腐植がよく浸透しており、黒味が強いが、やや過湿気味である。B層との境ははっきりせず、層位は厚い。これに属する土壌統は身延4統、早川3統である。これらの各統は沢沿いに帯状に小面積分布しており、スギ、ヒノキの人工林として利用されている。

5. 乾性ポドゾル化土壌

ポドゾル化土壌のうち、PDI-III型に相当する土壌である。A₀層はきわめて厚く、なかでもF-H層がよく発達している。A層はうすく、B層はチョコレート色の集積層がみられる。これに属する土壌統は早川4統である。分布域としては赤石山地の主稜線上に帯状に出現し、主として天然針、広混交林が生育している。

6. 湿性ポドゾル化土壌

ポドゾル化土壌のうちPw(h)I~III型に相当する土壌である。A₀層は厚く、特にH層がよく発達している。土壌断面は暗く、腐植の集積がはっきりしている。

これに属する土壌統は早川5統である。赤石山地の山頂平坦部及び巾広い凹型緩斜面に分布している。主として天然針、広混交林が生育している。

(日向 進, 馬場勝馬)

IV 傾斜区分図

5万分の1地形図「身延」,「赤石岳」図幅について,すべての等高線間隔に基づいて地表面の傾斜を分類した。分級は,40°以上,40°~30°,30°~20°,20°~15°,15°~8°,8°~3°,3°以下である。さらに3°以下の範囲について,2万5千分の1地形図により3°~ $\frac{1}{2}$ °, $\frac{1}{2}$ °~ $\frac{1}{4}$ °, $\frac{1}{4}$ °以下の区分を試みた。しかし,調査図幅内には広い低地が発達せず, $\frac{1}{4}$ °の境界を決めることはできない。なお,3°以下の範囲については,オーバーレイシートの傾斜区分図ではなく,地形分類図に直接表現することとした。

山地斜面の傾斜には,かなりの地域差が認められる。早川より西側の策ヶ岳山地では40°以上の急傾斜地が最も広範囲を占め,30°以上の斜面と合わせると,山地斜面の大半を占める。20°~30°およびそれより緩い斜面の分布は,尾根上,地すべり崩落物質上などに限られる。緩傾斜部は谷沿いにもあまり分布せず,急な山地斜面が直接谷壁をなして谷底に達していることを示す。

七面山山地では,40°以上の斜面の範囲はまだかなりあるが,策ヶ岳山地に比べてより小範囲に分かれるようになる。しかし,30°以上の傾斜の斜面が大半を占めている。この山地の特徴は七面山山頂部に広い緩傾斜地(3°~8°も含む)が分布することだろう。

富士見山山地では,40°以上の急傾斜斜面はさらに減少する。山地斜面の主体は30°~40°になるが,30°~20°,20°~15°の範囲が広く点在するようになる。この傾向は身延山山地および,天子山地の常葉川より南側についてもあてはまる。

以上の山地が30°以上の急斜面を主とするのに対し,平須丘陵性山地および,天子山地の常葉川以北では,30°~20°および15°~20°の斜面がモザイク状に入り組んで支配的になる。一方,30°~40°の急斜面は,それらの間に分布し40°以上の極急斜面はほとんど分布しない。この傾向は,富士川河谷右岸側の山地斜面でも認められる。平須丘陵性山地の曙礫岩層,富士川の下刻の歴史および,地すべりなどがその原因と考えられる。

(吉村 稔,平川一臣)

V 水系・谷密度図

5万分の1地形図「身延」,「赤石岳」図幅の各辺を40等分して得られるメッシュの区画線を切る水流の和を4メッシュごとに集計したものを谷密度とする。水系図は、その基礎資料であるが、上記地形図幅上の水流ならびに等高線から判読されるすべての谷線を示したものである。

水系のパターンは、概観すると、平須丘陵性山地とそれ以外の山地との間の差が顕著である。平須丘陵性山地では、概して谷の長さが短かく、しかもそれらの発達が良い。これは、礫岩層に制約されているためであろう。富士見山稜線から富士川へ向って流れる比較的大きな谷は傾斜に従い、支流は南北方向を向いて地質構造の影響を受けている傾向がある。

策ヶ岳山地でも、早川、雨畑川に流入する支流は東西方向を示し、これらの支流の多くは南北方向の直線的な谷が目立つ。この南北の方向性は地質構造支配を示す。

早川～春木川の主流は糸魚川―静岡構造線に沿っている。

谷密度は概して大きく、地域的な差異は認めにくい、平須丘陵性山地はやや大きい傾向がある。全体として水系の発達がよく、隣り合う水系が主稜線、支稜線を問わず、山稜部にまで達していることを示している。しかし、七面山山地や富士見山山地の稜線部で谷密度が小さい所が島状にあり、これは、広い山頂平坦面あるいは緩い凹型斜面の顕著な部分にあたっている。

(吉村 稔, 平川一臣)

VI 土地利用現況図

図幅の東部を南北に富士川が流れ、この川に沿って、この地域の重要な交通路であるJR身延線及び国道52号線が走り、役場や県の出先機関等の行政機関や文化施設は、この富士川流域に集中している。

水田、果樹園、茶園等の耕地も富士川及びその支流流域の沖積地や河岸段丘に多く山間の緩傾斜などにも畑や桑園が点在する。

その他、図幅の大半は林地であり、植生は、人口の針葉樹林が多く、また、比較的県有林、国有林などの公有林の割合が少なく、民有林の割合が高い。

この地域から生産される良質の木材は県内外に出荷されている。

資 料

コンピューター・マッピングについて

山梨県では、土地分類基本調査成果の活用を図るため、昭和61年度から地形、表層地質、土壌の3図幅の印刷についてコンピューター・マッピング方式を採用し、土地利用現況図についても、印刷業者の協力により、地図情報をコンピューターに入力しております。

“コンピューター・マッピング方式”とは、「コンピューターに地図情報を入力し、入力したデータを機械が解読し、これに基づいて印刷する」という方式です。

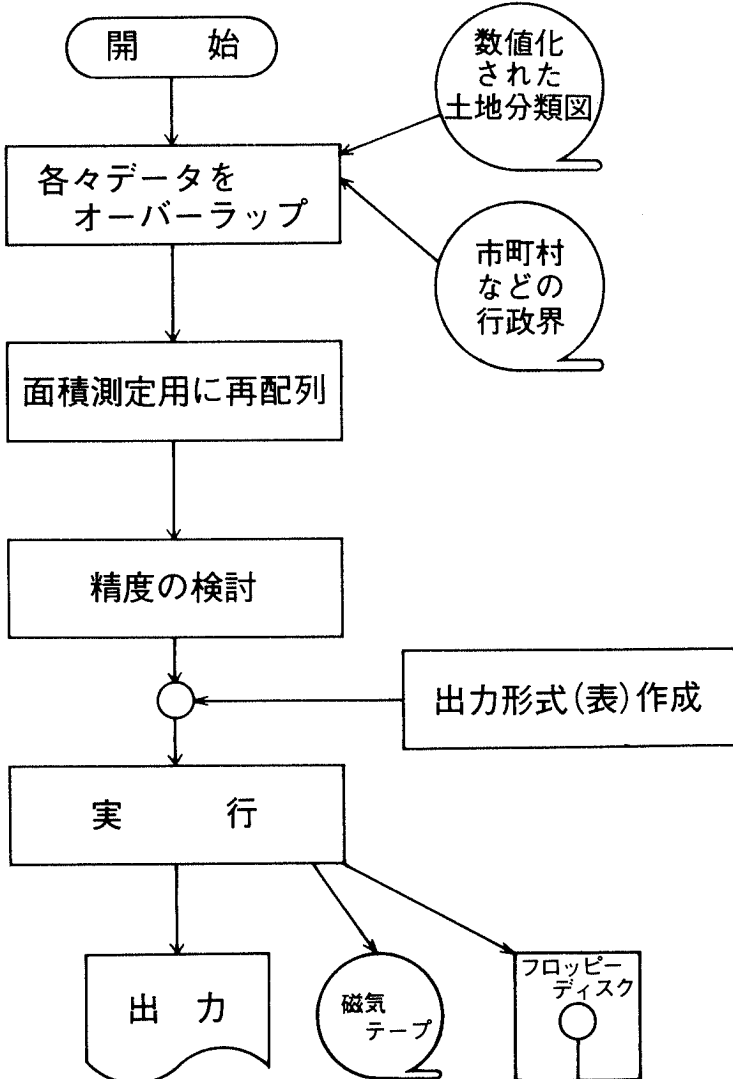
この方式により、複数の図面を重ね合わせた複合図面の作成や各凡例ごとの面積測定が可能になり、各種災害の危険地域を予測したり、利用目的ごとの開発の可能性を判断するなど、行政機関が計画を立案・検討する際に欠かせない重要な資料となります。

本年度のコンピューター・マッピング方式の成果として、地形分類図と土地利用現況図の面積測定の結果を登載いたしました。

なお、コンピューター・マッピング方式の採用により、この土地分類基本調査の成果がさらに多くの場で活用されることを希望しております。

土地分類基本調査における面積測定について

数値化された地図情報の利活用の1つとして面積測定が上げられます。今回の面積測定は、下記の流れによって作業を実施いたしました。



作成できる面積測定表の例

- ① 1 図葉中での各凡例の面積測定
 〈例 1〉
- ② 1 図葉中での、市町村を単位とした各凡例の面積測定
 〈例 2〉, 〈例 3〉, 〈例 4〉, 〈例 5〉

※入力されたデータ（面積測定成果）は、磁気テープ、フロッピーディスク等での保管が可能になり、従来の地図原図に比べて場所を取りません。また、成果の維持管理が容易であり、統一化した精度の図面を常時短時間で印刷することができます。

〔例-1〕

市町村面積測定結果

単位：km²

市町村名	面積
歟 沢 町	9.84
中 富 町	42.91
六 郷 町	8.73
下 部 町	32.61
身 延 町	86.60
南 部 町	2.06
早 川 町	223.86
合 計	406.61

〔例-2〕

低地・凸形斜面・凹形斜面の面積測定結果（市町村別）

単位：ha

市町村名	低地 3°～ $\frac{1}{2}$ °	低地 $\frac{1}{2}$ °～ $\frac{1}{4}$ °	凸形斜面	凹形斜面
歟 沢 町	0.00	0.00	45.64	3.39
中 富 町	121.56	35.30	58.60	0.00
六 郷 町	108.14	27.75	28.42	0.00
下 部 町	119.25	0.00	57.10	28.46
身 延 町	317.11	35.55	249.56	83.13
南 部 町	0.00	0.00	15.70	0.00
早 川 町	71.14	0.00	433.75	241.95
合 計	737.20	98.60	888.77	356.93

〔例-3〕
地形分類面積測定結果（市町村別）

単位：ha

凡 例 名	鯉 沢 町	中 富 町	六 郷 町	下 部 町	身 延 町	南 部 町	早 川 町	合 計
山地 斜面 30°～40°	607.78	1246.19	194.86	1368.78	4451.76	148.21	12693.60	20711.18
山地 斜面 15°～30°	241.14	1771.52	308.08	1280.38	2031.33	22.37	1951.83	7606.65
山地 斜面 15°以下	30.91	124.16	88.03	48.32	127.54	0.0	171.14	590.10
山地 斜面 40°以上	77.52	199.08	1.24	57.32	609.86	35.49	6416.19	7396.70
古期土石流扇状地及び堆積物	0.0	70.13	0.0	56.37	36.13	0.0	102.06	264.69
砂 礫 台 地	4.70	123.11	15.38	48.16	198.81	0.0	94.06	484.22
新期土石流地形	13.11	43.39	9.13	29.89	139.15	0.0	133.80	368.47
現 河 床	2.28	277.22	30.49	42.29	498.22	0.0	517.31	1317.81
道 路	1.95	67.70	18.35	109.36	153.12	0.0	89.49	439.97
谷 底 平 野	3.62	311.03	79.26	201.27	303.53	0.0	104.13	1002.84
旧 中 州・ポイント・バー	0.53	15.91	33.99	0.0	0.0	0.0	3.77	54.2
氾濫平野後背低地	0.0	14.38	52.32	0.0	0.0	0.0	0.0	66.70
河 川	0.0	77.06	12.97	19.27	107.38	0.0	103.88	320.56
小 扇 状 地	0.0	0.0	28.88	0.0	0.0	0.0	4.67	33.55
旧 流 路	0.0	0.0	0.0	0.0	3.50	0.0	0.0	3.50
合 計	983.54	4290.88	872.98	3261.41	8660.33	206.07	22385.93	40661.14

〔例-4〕

土地利用現況図面積測定結果（市町村別）

単位：ha

凡例名	鯉沢町	中富町	六郷町	下部町	身延町	南部町	早川町	合計
内水	2.03	73.17	17.64	20.45	110.00	0.0	109.15	332.44
市街地	1.04	162.04	114.78	120.48	196.98	0.0	74.16	669.48
天然針葉樹	0.00	0.53	0.0	0.0	43.96	0.0	1492.72	1537.21
道路	1.67	54.49	18.22	73.69	105.14	0.0	80.15	333.36
未立木地	60.89	49.18	9.76	89.97	176.41	2.75	1607.79	1996.75
天然広葉樹	307.56	1764.69	243.07	1609.01	3654.77	109.44	10754.42	18442.96
針葉樹林	498.05	823.70	140.94	684.48	2253.82	78.39	4494.35	8973.73
荒地	12.52	259.79	32.57	31.09	647.54	1.36	1651.39	2636.26
原野	91.92	319.43	56.03	175.51	814.48	14.13	1782.37	3253.87
普通畑	0.0	146.56	73.46	201.47	303.80	0.0	150.44	875.73
桑園	4.14	396.70	103.29	94.84	17.30	0.0	126.07	742.34
田	0.13	223.79	60.87	128.39	272.79	0.0	49.88	735.85
竹林	0.0	0.0	2.35	4.02	0.44	0.0	0.0	6.81
工場	3.59	5.67	0.0	15.86	56.74	0.0	9.35	91.21
公共施設	0.0	3.77	0.0	0.97	5.28	0.0	3.69	13.71
果樹園	0.0	7.37	0.0	11.18	0.88	0.0	0.0	19.43
合計	983.54	4290.88	872.98	3261.41	8660.33	206.07	22385.93	40661.14

〔例-5〕

単位：ha

凡 例 名	鯉 沢 町	中 富 町	六 郷 町	下 部 町	身 延 町	南 部 町	早 川 町	合 計
果 有 林	481.27	468.11	0.0	111.72	1014.54	0.0	8190.29	10265.93
水 源 か ん 養 保 安 林	454.88	375.29	0.0	111.72	119.26	0.0	6794.72	7855.87
土 砂 流 出 防 備 保 安 林	0.00	0.00	0.0	0.0	3.84	0.0	868.72	872.56

1989年3月 印刷発行

土地分類基本調査

身延・赤石岳

編集発行 山梨県農務部農村整備課
山梨県甲府市丸の内1-6-1

印刷 内外地図株式会社
東京都千代田区神田小川町3-22